



＜ショパンの肖像＞
ドラクロワ (Delacroix, Eugene, 1798–1863) 画

ショパン、フレデリック

Chopin, Frederic, 1810–1849

ポーランドの作曲家。旋律を創作する才能、大胆な和声感覚、形式についての直観的で独創的な把握力、そして数多くのピアノ曲を生み出した鮮やかなピアノの演奏技巧、これらすべてを併せ持つ音楽家であった。ピアニストとして音楽活動の第一歩を踏み出し、19世紀における一流の作曲家となったショパンは、かなり早い時期に演奏活動を断念した。しかし、ショパンの作品は、ロマン派のピアノにおける伝統の真髄を伝えるものであり、ピアノという楽器の持つ表現上、技巧上の特質を完璧に生かしているという点で、他の作曲家の追随を許さない。

(『ニューグローヴ世界音楽大事典』より)

「稀に見る傑出した人物だ。彼はぼくが会った最高の眞の芸術家だ。称賛にあたいし、高い価値をもつ数少ない一人だ。」

---ドラクロワよりパリの友人 J.B.ピエールに宛てた書簡 (1842年6月22日)
(アーサー・ヘドレイ編『ショパンの手紙』白水社, 1965より)

ピアニスト・ショパン

ショパンは作曲家であると同時に、19世紀において歴史に残る名ピアニストの一人だった。凄まじい音や派手な演出がもてはやされたり、安っぽい感情表現におぼれたりという時代の中で、ショパンは非の打ちどころのない優美さで、他の者とは一線を画していた。軽い、ほとんど空気のようなタッチによって、新聞雑誌にも一般大衆にも、たびたび「シルフ(空気の精)」や「エーリアル(同)」に例えられた。

生涯にたった 50 回のコンサート

ところがそれだけの力を持ちながら、ショパンはコンサートの舞台にはあまり姿を現さなかった。ワルシャワのラージヴィユ宮殿でデビューを飾った 7 歳から、ロンドンの市庁舎で最後の演奏をした 38 歳までの間に、公開の演奏会に出たのは 50 回に満たないと見てよいだろう。絶大な人気を誇っていたショパンが、なぜこれだけの限られた機会でしか自分のピアノの才能を披露しなかったのだろうか。

- ❖ ショパンが実際の身分は別にして、生まれつき貴族的な性格を身につけていた。このため雑然と人の集まる公の演奏会場の環境よりも、サロンの排他的な雰囲気を好んだ。
- ❖ ショパンの情緒的な気質が、現代と同じく才能とともに体力も要求された演奏家としての生活に適さなかった。当時成功を収めていた演奏家は、たいていが競争や自己宣伝に長けていたが、ショパンは彼らとは正反対だった。

「僕は演奏会を開くのに向いていない。おおぜいの前に出るのが怖いんだ。みんなの息づかいに胸が苦しくなり、好奇に満ちた目に体が硬直して、知らない人たちの前では物も言えなくなる」

- ❖ ショパンが勇気を奮い起こして大衆の前に出たときも、たいていは、弾き方が「柔らかすぎ」たり「弱すぎ」たりして、心から感銘できるほどのものではない、という批判を受けた。ショパンのような優雅な演奏スタイルで醸し出される繊細な美しさは、広い演奏会場の隅々までは伝わらないことが多かったのである。サロンや客間などの内輪での演奏でのみ、ショパンの本領は發揮された。

プロのピアニストに要求されたこと

エージェントやマネージャーという職業がほとんど知られていなかった時代には、演奏会を企画するという困難な作業に、気丈にも一人で立ち向かわなければならなかつたのである。その作業には会場を借りる交渉をしたり、プログラムを広告する方法を探したり、チケットを売る窓口を確保したり(演奏会場でチケット売り場を備えているところはまれだった)、共演してくれるよう他の音楽家を説得したり、オーケストラやコーラスを募ったり、練習させたりと言う雑用も含まれていた。

当時の演奏会の特徴

こういう準備のほとんどは、19世紀初頭のころの演奏会の特徴だった、異常なほど雑多に詰め込まれたプログラムから来るものだった。当時の催しは我々が想像するような純粋に文化的な出し物とはほど遠く、出演者や楽器をさまざまに取り混ぜたいわゆる「ごった煮」だった。その点、今のテレビのバラエティーショーに似ていると言えなくもない。音楽家だけでなく役者がプログラムに名を連ねることもたびたびだった。

(ウィリアム・アトウッド『ピアニスト・ショパン』東京音楽社、1991より)

ショパンの愛用していた楽器

ショパンの活躍した時代は、ピアノが改良を重ね、楽器の王者としての地位を確立していった時代だった。この時代のフランスを代表する2大メーカーが、プレイエルとエラール。プレイエルは打鍵の反復がしにくい構造だったが、音には優しくささやきかけるような独特的の色香があった。エラールは、打鍵の反復もしやすいなど構造に優れ、華やかな音色を持っていた。

ショパンはポーランドやウィーンではウィーン式の楽器で演奏していたが、パリではやはりフランスのメーカーのピアノを弾いていた。特に愛用していたのはプレイエルとエラールで、晩年にはそれにイギリスのブロードウッドが加わった。

(那須田務監修『ビジュアルで楽しむピアノの世界』学習研究社、2007より)

ショパンの演奏会に対する批評

(ウィリアム・アトウッド『ピアニスト・ショパン』東京音楽社, 1991 より)

アルゲマイネ・テアターツァイトウンク(一般演劇時報)、1829年8月20日、ウィーン

先日ショパンという若いピアニストが、ケルントナー門の王立劇場で演奏を行った。彼は今まで音楽界ではあまり名を知られておらず、そのすばらしく卓越した才能には、まだ計り知れないものが残されていると思われる。彼の作品や演奏に触れた者は、少なくとも彼独特の形と強烈な個性に対して、天才のひらめきを感じたことであろう。

…ショパンのタッチは澄んでいてしっかりとしているが、我々の天才たちがピアノの前にすわった瞬間から聴かせてくれるような、輝かしさには欠けていた。…この若者の演奏にはいくらか—しかも重要な一欠点があった。中でも目立ったのは、各フレーズの初めの部分にアクセントが足りない点だった。

- ♪ ベートーヴェン：バレエ音楽『プロメテウス』より序曲
 - ♪ ショパン：モーツアルトの主題による華麗なる変奏曲
 - ♪ ロッシーニ：オペラ『ビアンカとファリエロ』よりアリア
 - ♪ ボアエルデュー：『白衣の婦人』とポーランド民謡『チミエル』を
 主題にした幻想曲
 - ♪ ヴァッカイ：オペラ『ピエトロ・イル・グランデ』よりロンドと
 変奏曲およびコーラス
 (～休憩～)
 - ♪ コミック・バレエ「仮面舞踏会」全2幕
- ♪・・・ショパンが演奏した曲目

レ・ブー・エ・ガゼット・ムジカール、1841年5月2日、パリ

ショパンは十年前にフランスにやって来て以来、今日我々のまわりにあふれているピアニストの群れに紛れ、その中で優劣を競い合うということが皆無であった。そして公開ではなかなか腕前を披露しようとはしなかった。この上なく詩情に満ちた彼の才能は、そういうことにはそぐわなかつたのである。**夜にのみ香しい花弁を開く花のように、彼の中に眠る美しいメロディーの宝をみなに開放するには、静かで落ち着いた雰囲気が必要なのだ。**（リスト）

ラ・フランス・ムジカール、1842年2月27日、パリ

ショパンは詩人である。それもたいへん感受性の強い、まさに巨匠の名にふさわしい詩人である。技巧的には桁外れの偉業を成し遂げているが、それによって、素朴で独特の味わいを持つメロディーが損なわれるようなことは決してない。彼の手を目で追っていれば、どんなに鮮やかな手並みで優美な旋律を奏で、離れた鍵盤をつなぎ、ピアノからフォルテ、またその逆のあやを生み出しているかわかるであろう。プレイエルの優れたピアノがこの変化に富んだ演奏に一役買った。

このように、音やニュアンスが次から次へと流れ出て重なり合い、そうかと思うとまた離れ、やがて再びひとつになってメロディーを形作っていくのを聴いていると、銀の鈴の下でため息をつく妖精のかすかな声か、はたまたクリスタルのテーブルに落ちる真珠の雨音でも聞いているような気になる。（エスクディエ）

アテネウム、1848年7月1日、ロンドン

ほかのピアニストが指に均等の力を持たせようと努力している時に、ショパンはもともと均一ではないその力を利用しようとした。そしてそれが成し遂げられたとき、指を均等に使って上手に演奏する者にはできない変化に富んだ表現が生み出された。ショパン独特の音階やトリルの変わった使い方や、風変わりなレガートを生み出す方法として使われる、鍵盤から鍵盤へ指を滑らせたり、中指に薬指をまたがせるやり方はここに起因している。…**彼はテンポ・ルバートを自在に使いこなす。**我々が想像し得るどの演奏家よりも小節の中で自由にテンポを揺らしながら、しかも自由奔放さにすぐに耳を慣れさせるような、旋律の中心となる情感に支配されている。

出版楽譜

ショパンは生存中 3 つの版を同時に出版した。つまりパリのブランデュス Brandus 版のちにシュレサンジェ(シュレージンガー)版、ロンドンのウェッセル Wessel 版、ライプツィヒのブライトコップ・ウント・ヘルテル版である。この 3 社へ渡す原稿はショパンの自筆か写譜したもので、写譜家には 1835~41 年まではフォンタナ Julian Fontana、1841~48 年まではフランショムが当たった。ショパンは校正時に書き直すこともあり、校正の誤りを見のがすこともあった。つまり、この 3 つの初版にもそれぞれ違いがあった。さらに、op.66~74 のようにショパンの死後出版されたものはフォンタナの手がかなり加えられている。したがって、ショパンの意図を正しく表現し、これにできるだけ一致した楽譜を作ることは容易ではなく、現在まで各国で多くの版が作られている。

(『音楽大事典』平凡社、1981~1983 より)

19 世紀半ば頃から現在までの約 140 年間に出版された世界のショパンの楽譜の編集者別の種類はおよそ 30 を超えると思われる。戦前は大ピアニストの見識ある意見に基づく、各種の校訂版が目立った。しかし戦後は自筆譜や初版楽譜によって作曲者の真の意図をくみとつて作られた原典版が現われ、一つのブームとなっている。

(高橋淳『楽譜の話』草思社、1985 より)



高橋淳『ピアノ・レパートリー事典』春秋社、1988 年で挙げられている出版楽譜について紹介します。

♪紹介記事は下記の資料を引用しています。

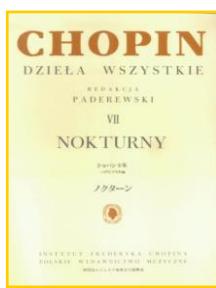
N = ニューグローブ世界音楽大事典 Web

P = 高橋淳『ピアノ・レパートリー事典』春秋社、1988 年。

G = 高橋淳『楽譜の話』草思社、1985。

M = 河合優子「エキエルによるナショナル・エディション楽譜をめぐって」

(『ムジカノーヴァ』2002 年 11 月号)

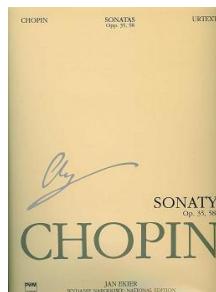


ポーランド音楽出版社(ポーランド)／Polskie Wydawnictwo Muzyczne
(PWM)

日本語版: ジエスク音楽文化振興会

パデレフスキ(校訂)／プロナルスキ、トゥルツィンスキ(編集)

ショパンの全作品を網羅した完全な全集は、1937年から66年にかけてワルシャワのショパン研究所とクラクフのポーランド音楽出版社が出版したもの1種類だけである。この全集はすべて注釈付きの楽譜20巻から成り、ほかに器楽曲の楽譜6部がついている。編集上の志は、極めて高いものであるが、西欧諸国の図書館にある重要な資料を編集者が利用できなかつたため、完璧な全集とはいえない。複数の異なる資料がある場合、編集者は美学的見地からのみいづれかを採用するといった傾向が見られる。(N)



ポーランド音楽出版社(ポーランド)／Polskie Wydawnictwo Muzyczne
(PWM)

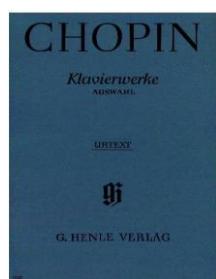
エキエル(校訂)

ナショナル・エディション。

パデレフスキ版の出版以来20年を経過し、新しい原典版として1967年から出版が始まった。(G)

ポーランドの経済悪化で一部しか出版されないまま経過したが、体制の自由化によって1995年からようやく軌道に乗ってきた。(P)

特徴として、ショパン以外の人による変更、加筆ができるかぎり取り去ったこと、ショパンのオリジナルで信頼できるものが複数ある場合、ひとつにしぶらずにすべて載せたことなどが挙げられる。(M)



ヘンレ社(ドイツ)／Henle

ツインマーマン(校訂)／テオポルド、ケラー(運指)

原典重視の思想が貫かれ、各曲ともショパンの自筆譜(現存する場合)、および自筆譜に基づくと考えられる当時の版を採用している。その他すべての資料が参考にされている。(N)

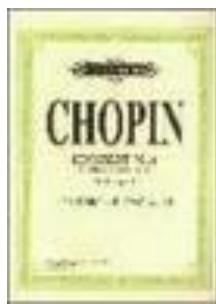


ウィーン原典版(オーストリア)／Wiener Urtext Edition

日本語版: 音楽之友社(Ongaku no Tomo Edition)

ハンゼン、デームス、バドウラ・スコダ、エキエル他(校訂)

ハンゼン、デームス、バドウラ＝スコダなど活躍中のピアニストの意見をとりいれているところに特色がある。(G)

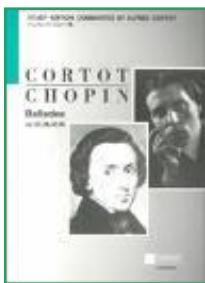


ペータース社(ドイツ、アメリカ)／Peters

ショルツ、ポツニアク(校訂)

日本の楽譜は最近までほとんどがこのリプリントだった。ドイツのピアノ奏者ショルツの標準的な編集と思われてきたこの版も、現代の要求には応えられないということもあって、ポツニアクが一部改訂を加えた版が出た。(P)

現在、「The complete Chopin: A New Critical Edition」というシリーズが刊行中。編集は John Rink, ジム・サムソン, ジャン=ジャック・エーゲルデインゲルによる。(Edition Peters 公式ウェブサイト www.edition-peters.com より／2008.3 現在)

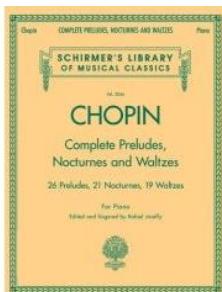


サラベール社(フランス)／Salabert

日本語版:全音楽譜出版社(Zen-on Music)

コルトー(校訂)

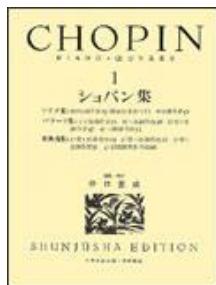
運指はもとより強弱・トリル・前打音など詳細な指導的説明を加えた校訂版。1962 年まで活躍した大ピアニストのコルトーの解釈に意義がある。(P)



シャーマー社(アメリカ)／Schirmer

ミクリ(校訂)

100 年も前の出版なので現在は多少問題があるが、ルーマニア系ポーランドのピアニストのミクリはショパンの弟子であったので、時代を超えてこの編集は参考となる。なお、ショパン研究家ハネッカーによる序文とミクリの注解が付いている。(G)



春秋社(日本)／Shunjusha Edition

井口基成(校訂)

ピアニスト・ピアノ教師としての長年の経験にもとづき、各種の版を参照して編集された実践的な解釈版。6 冊に分かれ、強弱・スラー・ペダル等の奏法、的確な運指法など、ショパン様式にかなった補足がなされている。(P)



音楽之友社(日本)／Ongaku no Tomo Edition

クロイツァー(校訂)

レシェティツキ門下のエッシボウの高弟だったクロイツァーは故国ロシアを追われ、1938 年より亡くなるまで 15 年間滞日し、現在わが国の演奏・教育活動の長老となっている多くのピアニストを育てた。校訂者による発想記号・スラー等は小記号で書かれている。最初ドイツで出版されたが、日本に移り、戦後は新版となつた。(G)

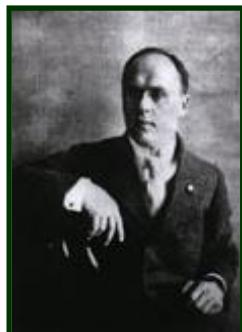
ショパン国際ピアノ・コンクール

ポーランドのピアノ・コンクール。ショパンを記念して 1927 年に創始され、ワルシャワで 5 年ごとに開催される。1937 年第 3 回のあと、第二次世界大戦のため一時中断、1949 年に再開され、1955 年の第 5 回からは、当初の計画どおり 5 年ごとに行われる。ピアノ・コンクールとしては権威あるもののひとつ。

(『標準音楽辞典』音楽之友社、1991 より)



1925 年、ショパン音楽院教授でワルシャワ音楽協会で活動していたイエジ・ジュラヴレフ (1887-1980) が、ショパンの作品のみを演奏するピアノコンクール開催を申し出た。その目的を回想録の中でこう語っている。



ショパン・コンクールの創始者 ジュラヴレフ

ショパンコンクール開催のアイデアは 1925 年に生まれた。第一次世界大戦が終了してしばらく経ったころ、若者たちはスポーツに熱中していたが、彼らの考え方や自己の生活態度は誠に現実的なものだった。このころ、ショパンはロマンティック過ぎて、魂を感傷的にさせ、精神的に弱くするので、音楽教育プログラムの中に彼の作品を入れるべきではないという意見を述べる人たちもいた。ショパンの音楽を理解していないこれらの見解は、私にとって非常に痛みをもたらした。私はショパン礼賛の雰囲気の中で育ち、素晴らしいショパン弾きのピアニスト、アレキサン德尔・マワホフスキ教授に薰陶を受けたので、そうした考え方に対する賛成することができず、なんとかそうした状況を開拓しようと決意した。

スポーツに熱中する若者たちを観察するうちに、解決策を見出した。

「そうだ、コンクールだ！」

ショパンの作品を再現する若者たちにとって、コンクールは何に役立つだろうか？ まず最初に賞金、第二に世界の舞台での活躍の可能性がある。では、ショパンの音楽にとっては？ 若者たちは、コンクールを勝ち抜くために、とにかくショパンができる限り上手に弾かなければならない。また、賞をとれなかつた参加者も、課題曲をマスターするはずだから、その後の自分のコンサートなどで大いに役に立つはずである。フィルハーモニーで弾くために若者たちが乗り越えなければならない障害も、彼らにとって大きな挑戦ということになろう。私の考えが間違っていたといったことが後に証明された。

(アルベルト・グルジンスキ、アントニ・グルジンスキ共著

『ショパン：愛と追憶のポーランド』ショパン、2006 より)

コンクール創設の背景



ショパンの祖国ポーランドは、近世に至り前後三回にわたって、その存在が世界地図上から消えている。そして、ポーランドが独立国として再復帰するのは、いずれもヨーロッパあるいは世界史上の大変動が生じた直後であった。…ショパン・コンクールが始まったのは二度目の復活期である第二共和制の真っただ中のことである。



第一次世界大戦の終了後、1918 年にポーランドは独立を宣言するが、国境をめぐっては敗戦国のドイツや、戦勝国ながら革命が起こったロシアと交渉あるいは戦闘が続いた。東と西の国境が最終的に確定したのは 1922 年の終りのことである。その後も国内の不安定な政治状況が絶えなかった。経済も農業と工業の慢性的な不振が続き、少し好転すると世界的な不況のあおりを受けるなどして一向に改善の兆しが見えなかった。しかしながら、真の独立は人々の気持ちを明るくし、教育や文化の発展にこれまでには見られない意欲が注ぎ込まれるようになった。これらのことさらなる民族意識の高揚へと繋がっていく。当時、ショパンは既にポーランドが輩出した世界的に最も有名な存在の一人であった。まさにこの時期は、彼の名を冠したコンクールを創出するまたとない好機だったのである。

(佐藤泰一『ドキュメントショパン・コンクール：その変遷とミステリー』春秋社、2005 より)

コンクールの会場となるワルシャワ国立フィルハーモニーホール



最初の三回のコンクールは今日と同じヤヌア通りに面したフィルハーモニーホールで催され、四回目(第二次大戦後初めて)のコンクールは、フィルハーモニーが戦災で破壊されていたので、ノヴォグロツカ通りのオペラハウス「ローマ」で開催されたが、五回目以降今日に至るまで、国立フィルハーモニーホールで催されている。

(アルベルト・グルジンスキ、アントニ・グルジンスキ共著『ショパン：愛と追憶のポーランド』』ショパン、2006 より)

ショパンコンクール 関連ウェブサイト

<http://www.konkurs.chopin.pl/> ショパンコンクール公式サイト(英語、ポーランド語)

演奏家紹介（五十音順）

ショパン国際コンクール（第1回から第15回）の3位までの受賞者と、浜田滋郎「ショパン弾きの系譜」（『音楽の友』1998年11月号）に挙げられている演奏家のうち、本学図書館が資料を所蔵するピアニストをご紹介します。

♪紹介記事は下記の資料を引用しています。

N =	ニューグローブ世界音楽大事典Web
E =	『演奏家大事典』音楽鑑賞教育振興会、1982年。
P1 =	『ピアノとピアニスト2003(Ontomo mook)』音楽之友社、2003年。
P2 =	『ピアノ&ピアニスト2008(Ontomo mook)』音楽之友社、2008年。
D =	佐藤泰一『ドキュメントショパン・コンクール：その変遷とミステリー』春秋社、2005年。
HP =	本人才オフィシャル・ウェブサイト

アシュケナージ Ashkenazy, Vladimir, 1937-

ソヴィエト連邦（ロシア）のピアニスト。55年にモスクワ音楽院のレフ・オボーリンのクラスに入り、同年、第5回ワルシャワ・ショパン国際コンクールで2等賞を獲得した。
ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全集、ショパン・ピアノ曲大全集をはじめ、ベートーヴェン、ラフマニノフ、プロコフィエフのピアノ協奏曲全集などがある。
75年頃から指揮者としても活動し、87年よりロンドンのロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督を務めている。（N）

<http://www.vladimirashkenazy.com/> （英語）

アラウ Arrau, Claudio, 1903-1991

チリのピアニスト。アラウはブームス、シューマン、リスト、ショパン、とりわけベートーヴェンの解釈で名声を得ており、多数のレコード録音がその証明となっている。名人芸の持ち主であるが、それをひけらかすことはない。テンポは時に著しくゆっくりとしており、そうでない場合でも、各フレーズの特徴や形態を深く考えたという印象を与える。（N）

アルゲリッチ Argerich, Martha, 1941-

アルゼンチンのピアニスト。1965年3月の第7回ワルシャワ・ショパン国際コンクールに優勝し、ショパンのマズルカとワルツでポーランド放送賞を受けるという大成功を遂げた。その技巧は、必ずしも感情の抑制を伴うとはいえないが、同世代のなかでは最もすぐれている。アルヘリッチの演奏はショパン、リスト、バルトーク、プロコフィエフの難曲において真価を發揮し、その自由奔放な輝きは注目に値する。（N）

イム・ドンヒョク Lim, Dong-Hyek, 1984-

ソウル（韓国）生まれ。すでにコンサート・ピアニストとして各地で高い評価を得ているイム・ドンヒョクは、ロシアとドイツで学んでいる。2005年にはショパン国際ピアノコンクール第3位、07年チャイコフ斯基国際コンクール第4位を受賞している。（P2）

ヴェデルニコフ Vedernikov, Anatolii, 1920-1993

ソヴィエト（ロシア）のピアノ奏者。モスクワ音楽院卒業後、演奏活動を開始し、現代ソヴィエトの作品の紹介に熱心で、プロコフィエフのピアノ協奏曲第4番やショスタコーヴィチの「24のプレリュード」をはじめ、初演した作品が多い。またプロコフィエフのピアノ・ソナタを校訂・出版している。（E）

内田光子 ウチダ、ミツコ, 1948-

1955(昭和30)年から60年まで、桐朋の「子供のための音楽教室」で松岡貞子に学ぶ。12歳のとき外交官の父親の転勤に伴い、ウィーンに転居。10代のうちから数多くの国際コンクールに上位入賞を果たし、1970年ワルシャワ・ショパン国際コンクール第2位を獲得。ロンドンを本拠とし、シカゴ、ニューヨーク、東京、パリ、ミラノなど、北アメリカ、日本、ヨーロッパ各地で活発な演奏活動を続けている。技巧、音楽性共にスケールが大きく、国際舞台で活躍する日本の代表的ピアニストの一人である。(N)

<http://www.mitsukouchida.com/>

ウニンスキイ Uninsky, Alexander, 1910-1972

ロシア、のちアメリカのピアノ奏者。1932年第2回ショパン国際ピアノ・コンクールで第一位となり、以後ヨーロッパを中心に活躍。チャイコフスキーやリスト、ショパンの作品を得意とした。(E)

遠藤郁子 エンドウ、イクコ, 1944-

日本のピアノ奏者。1965年ショパン国際ピアノ・コンクールで特別銀賞を受賞。さらに1965年～70年ルドヴィク・ステファニスキ、ハリーナ・チェルニーステファニスキのもとで研鑽をつみ、1970年にはショパン国際ピアノコンクールに入選した。(E)

http://yaplog.jp/endou_ikuko/

オボーリン Oborin, Lev, 1907-1974

ソヴィエト連邦(ロシア)のピアニスト、教師。1924年にデビューし、27年に第1回ワルシャワ・ショパン国際コンクールで優勝した。以後、各地で公演した。オボーリンは均齊のとれたテクニックの持ち主であり、美しいレガートを用いて、単純、明快、かつ印象的に演奏する。(N)

オールソン Ohlsson, Garrick, 1948-

アメリカのピアニスト。本格的な活動は、1970年のワルシャワ・ショパン国際コンクールで優勝してからである。ワルシャワでの成功でショパン奏者としての名が高まったが、トムキンズの作品をはじめとする幅広いレパートリーを持っている。ショパンの後期の作品に見られる微妙なフォームを表現できる、謙虚で極めて知性にあふれるピアニストである。(N)

キーシン Kisin, Evgenii, 1971-

ロシアのピアニスト。10歳のときにモーツアルトの「ピアノ協奏曲第20番ニ短調」を演奏してデビューし、翌年11歳で、モスクワで初めてのリサイタルを開き、さらにオーケストラとの共演も何度か経験した彼は、1986年のチャイコフスキイ国際コンクールのオープニング記念コンサートに出演して、広く世界の聴衆にその名を知られるようになった。86年に初来日したキーシンは、天才少年ピアニストとして注目を集め、その希有の才能を我々に知らしめた。その後もたびたび日本で演奏し、高い人気を保っている。(P1)

<http://www.kissinmusic.com/> (英語)

ケナー Kenner, Kevin, 1963-

アメリカのピアニスト。1990年の第12回ショパン・コンクールでは1位なしの第2位に入賞、ポロネーズ賞も受賞した。これを機に世界的な演奏活動をスタートさせ、日本にも毎年訪れている。自然な音楽的感興が印象的なピアニストで、ショパンなどのCDがある。(P2)

<http://www.kevinkenner.com/> (英語)

ゴドフスキー Godowsky, Leopold, 1870–1938

ポーランド生まれのアメリカのピアニスト、作曲家。ゴドフスキーの演奏活動は、1930年、ショパンのノクターンのレコード制作中に体の一部に麻痺を起こして突然終わりを告げた。しかし彼は、その後も名人芸的なピアノ曲の作曲と編曲を続け、ショパンのエチュードに基づく一連の53の練習曲、ヨハン・シュトラウス(ii)のワルツの数曲の手の込んだパラフレーズ、〈ルネサンス Renaissance〉(24の編曲)といった作品を残している。(N)

<http://www.godowsky.com/> (英語)

コブリン Kobrin, Alexander, 1980–

ロシアのピアニスト。98年グラスゴー国際ピアノ・コンクール第1位、99年ブゾーニ国際コンクール第1位、2000年ショパン国際ピアノ・コンクール第3位と、3年連続して世界の名だたる国際コンクールに上位入賞を果たした。現在、コブリンは多忙な演奏活動の傍ら、母校のグネーシン音楽院で後進の指導にもあたっている。(P2)

<http://www.alexkobrin.com/> (英語)

コルトー Cortot, Alfred, 1877–1962

フランスのピアニスト、指揮者。コルトーの演奏するショパンは高く評価され、手に入る比較的初期の音質の悪いレコードも、その繊細な叙情性と気品は変わることなくピアニストたちを眩惑し続けた。また、ショパンのピアノ曲の大部分(リストとメンデルスゾーンについても少々)を校訂しており、それらは「研究版」と呼ばれ、作品に関するテクニック上の実践や注釈を収録している。(N)

シェバノワ Shebanova, Tatiana, 1953–

ソヴィエト(ロシア)のピアノ奏者。1980年ショパン国際ピアノ・コンクールで第二位に入賞した。1981年初来日。(E)

ジュジアーノ Giusiano, Philippe, 1973–

フランスのピアニスト。1955年のショパン国際コンクールで、スルタノフとともに1位なしの第2位に入賞し、注目を集めましたが、それまでに世界各地で演奏活動を始めていた。彼の演奏は、線が細いが、磨かれた感性が発揮されており、堅実に積み上げてきたキャリアを印象づけるような、格調高い落ち着きを感じさせる。(P1)

スルタノフ Sultanov, Alexei, 1969–2005

1989年ヴァン・クライバーン国際コンクールで優勝、95年にはショパン国際ピアノコンクールで最高位(1位なし、第2位)入賞を果たしたが、その判定に論争もあり話題を呼ぶ。彼の演奏の魅力は高度なテクニックを駆使し、力強い情熱をたぎらせる若々しさにあった。(P1)

<http://alexeisultanov.free.fr/> (英語)

ソコロフ Sokolov, Grigorii, 1950-

ソヴィエト(ロシア)のピアノ奏者。1966年にチャイコフスキー国際コンクールに参加し、最年少の16歳で第一位となり大いに注目を集めた。以降独奏者としてヨーロッパ各地に演奏旅行する一方、レニングラード音楽院に進み、パーゲル・セレブリヤコフに師事してさらに研鑽をつんで1973年卒業。(E)

www.grigory-sokolov.com (英語、ロシア語)

ソフロニツキー Sofronitskii, Vladimir Vladimirovich, 1901–1961

ソヴィエト連邦(ロシア)のピアニスト、教師。ソフロニツキイは眞のピアノの詩人である。彼の芸術的個性は特に、お気に入りの作曲家スクリャービンや、ラフマーニノフ、ショパン、シューマン、リストなどの曲によく表現されている。そこにはロマンティックな豊かさと自由で即興的な感性、靈感と比類ない美しさを持つ音色、リズム、ペダリングが独自の説得力を持って示され、同時にその演奏には、深く成熟した思慮や強い緊張感があった。(N)

<http://www.sofronitsky.com/> (英語)

タマルキナ Tamarkina, Rosa, 1920–1950

キエフ生まれのピアニスト。第3回ショパン国際ピアノ・コンクールで第2位入賞。コンクール時には、全くあがるということがなくいつも颯爽としていて、同輩のザークを羨ましがらせた逸話が残っている。また、幻想曲の演奏で審査員のバックハウスに激賞されたことはあまりにも有名である。彼女は、その幻想曲の後日録音とスケルツオ第三番の録音しか、ショパン演奏を後世に遺さなかった。(D)

ダン、タイ・ソン Dang, Thai Son, 1958-

ヴェトナムのピアノ奏者。1980年ショパン国際ピアノ・コンクール第一位、NHK賞受賞。幼少時からヴェトナムで、1977年以降はモスクワを中心に活動している。1981年初来日。(E)

<http://www.dangthaison.net/> (英語)

チェルニー=ステファンスカ Czerny-Stefanska, Halina, 1922–2001

ポーランドのピアニスト。エルジュビエタ・ステファンスカの母。49年にワルシャワのショパン国際コンクールで優勝を分け合った後、各国で演奏会を開き、しばしば2台のピアノのための作品で夫のルドヴィク・ステファンスキと、2台のピアノあるいはピアノとハープシコードのための作品では娘と共に演ずる。(N)

<http://www.czerny-stefanska.net/> (ポーランド語)

ツィマーマン Zimerman, Krystian, 1956-

ポーランドのピアノ奏者。1975年ショパン国際コンクールに優勝、同時にポロネーズ賞、マズルカ賞も受賞して注目される。世界各地でリサイタルを開いている。(E)

ネイガーウズ Neigauz, Genrikh Gustavovich, 1888–1964

ソヴィエト連邦(ロシア)のピアニスト、教師。広く教養のある音楽家で、力強く情感的だが、毅然として優雅な演奏を見せるすぐれたピアニストであった。その演奏は厳格な客觀主義とは程遠く、自然で詩的に響き、表現の幅は広かった。シューマン、ショパン、スクリヤービン、リストのイ長調協奏曲、ドビュッシーなどを得意とし、1946年には1回のコンサートでドビュッシーの24の前奏曲の全曲を演奏した。(N)

バックハウス Backhaus, Wilhelm, 1884–1969

ドイツのピアニスト。バックハウスは、ライプツィヒのピアノ奏法の偉大な伝統を受け継ぐ最後の演奏家である。彼の演奏は、概して飾りけがなく毅然としており、気品のある古典派音楽の解釈で知られる。また、最も得意とした大規模な作品では堅固な構成力をを見せ、誠実な演奏で定評があり、作曲家の「献身的なまでに無私の代弁者」と評されるほどであった。(N)

パデレフスキ Paderewski, Ignace Jan, 1860–1941

ポーランドのピアノ奏者、作曲家、政治家。1888年ピアノ奏者としてパリでデビュー、次いでウィーン、アメリカ各地で活躍した、1909年ワルシャワ音楽院の院長となるが、第一次大戦のためアメリカに移り、祖国救援の演奏会を開いた。戦後ポーランド人民共和国の初代首相に選ばれたが1年で退き、スイス、アメリカで演奏活動を再開。

前世紀末から今世紀にかけての最大のピアノ奏者の一人で、特にショパン、シューマンの演奏で知られた。(E)

パパジヤン Papazyan, Artyun, 1954–

ソヴィエト(ロシア)のピアノ奏者。1980年ショパン国際ピアノ・コンクールで第三位を獲得した。その後ソヴィエト国内で研鑽をつむとともに、演奏活動を開始した。(E)

パハマン Pachmann, Vladimir de, 1848–1933

ウクライナ出身のピアニスト。パハマンは非常に繊細なタッチの持ち主であり、特にショパン作品の演奏は、当時の多くのピアニストたちの羨望の的となった。晩年の彼はショパン以外の作品をほとんど弾くことはなかった。その経歴に見られる激しやすい気質は有名で、演奏中の特異な癖や種々のしぐさ、および聴衆への突然の演説などとなって現れる。(N)

ハラシェヴィチ Harasiewicz, Adam, 1932–

ポーランドのピアノ奏者。1955年第5回ショパン国際ピアノ・コンクールでウラディーミル・アシュケナージを押さえて優勝。1960年ショパン生誕150年を記念して文化使節としてニューヨークに派遣され、成功をおさめる。1961年初来日。(E)

ピリス Pires, Maria Joao, 1944-

ポルトガルのピアノ奏者。1970年ブリュッセルで開かれたベートーヴェン生誕200年記念コンクールに優勝し、以来ドイツ、フランスを中心にヨーロッパ各地で活動している。(E)

フー、ツォン(傅聰) Fou, Ts·ong, 1934-

中国生まれのイギリスのピアニスト。1955年にはワルシャワのショパン国際ピアノ・コンクールで3位に入賞し、併せてマズルカの演奏により特別賞を獲得した。さまざまな音楽に広く関心を寄せているが、繊細なタッチと鋭い感性の持ち主で、強靭で激しい曲よりも細かい技巧が要求される作品に本領を発揮した。(N)

フェドキナ Fedkina, Tatyana

ソ連(ロシア)のピアニスト。第9回ショパン国際ピアノ・コンクールで第3位入賞。モスクワ音楽院進学後は一貫してマリーニンの指導を受けるが、在学中に参加したのがこのコンクールだった。既に12歳で演奏会デビューをはたしていた彼女は、1980年代にはソロの演奏家としてモスクワ・フィルに所属し、バッハからシェードリンにいたる広いレパートリーを引っさげて、ソ連国内と東欧諸国を繰り返し演奏旅行をしている。(D)

ブーニン Bunin, Stanislav, 1966-

1985年ショパン国際コンクールで第1位となり、併せてポロネーズと協奏曲の最優秀演奏賞を獲得。10代にして最高の栄冠を手にした天才的名ピアニストである。ブーニンは節目の年に原点回帰でショパンに取り組み、格別の共感を寄せている。デビューからこれまで、ヴィルトゥオーゾぶりはそのままに、ブーニン節といわれる独自のセンスと勇壮果敢なスリルにみちた演奏から、内面へと向かう思考型の演奏に変わってきたが、常に音楽に賭ける一途な想いにあふれている。(P2)

フランソワ Francois, Samson, 1924-1970

フランスのピアニスト、作曲家。1943年には後にロン-ティボー国際コンクールとなる大会の第1回で優勝した。以後、国際的に演奏旅行を行う。特にショパン、リスト、ドビュッシー、ラヴェル、バルトーク、プロコーフィエフの演奏で知られ、数多くの録音を残した。(N)

ブレハッチ Blechacz, Rafal, 1985-

ポーランドのピアニスト。2005年第15回ショパン国際ピアノ・コンクールの覇者である。「私のコンセプトは奇をてらうことではなく、楽譜に書かれたことをいかに読み解き、本来あるべき姿にいかに自分の直感を重ねるか」と語るブレハッチであるが、それこそがショパン演奏の原点であり、また今後に新しい道を拓いていくのだろう。(P2)

http://www.blechacz.net/ (英語、ポーランド語)

ヘッセ=ブコウスカ Hesse-Bukowska, Barbara, 1930-

ポーランドのピアノ奏者。1949年第4回ショパン国際ピアノ・コンクール第二位。ヨーロッパ各地で演奏する。1953年ロンティボー国際コンクール第五位およびショパン賞獲得。(E)

ペライア Perahia, Murray, 1947-

イベリア系ユダヤ人の血を引くアメリカのピアニスト。彼がまれな鋭敏さを持った音楽家として称賛されるのは、弱音の半透明な陰影に富む繊細さと、フレージングのごく自然な叙情性に起因している。録音には、ショパン、シューマンの独奏曲、メンデルスゾーン、モーツアルトの協奏曲などがあり、モーツアルトでは、独奏と指揮の両方を担当することもある。(N)

<http://www.murrayperahia.com/> (英語)

ポゴレリチ Pogorelich, Ivo, 1958-

ユーゴスラヴィアのピアノ奏者。ユーゴスラヴィア国内のコンクールで第一位となったのち、1978年イタリア、テルニのアレッサンドロ・カサグランデ国際ピアノ・コンクール、1980年モントリオール国際コンクールに優勝。同年ショパン国際ピアノコンクールにも参加、本選には出場できなかったが、この決定を不満とする審査員の退場、多くの聴衆の抗議で大きな話題となった。以後ヨーロッパ、アメリカで活躍、1981年初来日した。(E)

ポリーニ Pollini, Maurizio, 1942-

イタリアのピアニスト。1960年にワルシャワ・ショパン・コンクールで優勝する。60年からヨーロッパやアメリカ各地で定期的に演奏を開始し、同世代の演奏家のなかで最も有能で奥深い人物の一人であると目されるようになった。数多くの代表的な指揮者のもとで演奏したが、特にクラウディオ・アバードとの共演は名高い。(N)

ボレット Bolet, Jorge, 1914-1990

キューバ生まれのアメリカのピアニスト。60年代初頭から、彼の芸術性と技巧は群を抜いているとして喝采を浴びるようになる。ヨーロッパではあまり演奏していないが、アメリカではロマン派のピアノ奏法の偉大な伝統を継承する最後の人物と考えられている。(N)

ホロヴィツ Horowitz, Vladimir, 1904-1989

ウクライナ出身のアメリカのピアニスト。ホロヴィツは、超人的な速度と力強さで演奏できる並外れたピアニストで、極めて個性的な金属的ともいえる音色を持ち、アーティキュレーションやダイナミクスを驚くほど自在に操った。(N)

<http://www.sonymusic.co.jp/artist/VLADIMIRHOROWITZ/> (英語)

マガロフ Magaloff, Nikita, 1912–1992

ロシア生まれのスイスのピアニスト。マガロフはほとんどの有名な管弦楽団や指揮者と共に演奏し、主な音楽祭でも演奏している。彼は特にその温かいロマン主義的感情表現で有名であり、中でもショパンの演奏にすぐれ、ヨーロッパ各地の一連の公演旅行でショパンの全曲演奏を行っている。(N)

マルクジンスキ Malcuzynski, Witold, 1914–1977

ポーランドのピアノ奏者。スイスでパデレフスキに個人的に教えを受けた。1937年にはワルシャワのショパン国際ピアノ・コンクールで第三位に入賞した。1939年フランスのピアノ奏者コレット・ガヴォーと結婚してパリへ移住。1949、56年には世界演奏旅行も行い、1958年にはポーランドを訪れ、1960年のショパン生誕150年にはポーランドで18回の演奏会を催し、ショパン国際ピアノ・コンクールの審査員も務めた。(E)

ミケランジェリ Michelangeli, Arturo Benedetti, 1920–1995

イタリアのピアニスト。彼は完璧なテクニシャンであり、色彩と対位法の見事なコントロール、演奏における枠組みと細部の明晰さ、直ちに認識できるロマン派の熱情と古典派の平静さとの極めて独特な調和などによって、とりわけ知られている。レパートリーは比較的少ないが、自ら課した範囲内の作品の演奏はいずれも完璧なものである。(N)

<http://www.arturobenedettimichelangeli.com/> (英語、イタリア語)

モレイラ=リマ Moreira-Lima, Arthur, 1940–

ブラジルのピアノ奏者。1965年ショパン国際ピアノ・コンクールで第二位に入賞、演奏活動を開始した。その後も1969年リーズ国際ピアノ・コンクール、1970年チャイコフスキイ国際コンクールとともに三位に入賞した。1975年初来日。(E)

<http://www.arthurmoreiralima.com.br/> (ポルトガル語)

ヤブウォンスキ Jablonski, Krzysztof, 1965–

ポーランドのピアニスト。1985年のショパン・コンクールには第3位に入賞した。その後もパームビーチ国際やモンツァ国際コンクールで第1位を得るなど著しい戦績を残す。ヤブウォンスキの演奏は豊かな色彩を携えた、透明感のある美しい音色と繊細でデリケートな佇まい、そして極めて精度の高いテクニックで、作品の存在感を著しく際立たせる。(P2)

横山幸雄 ヨコヤマ、ユキオ, 1971–

1971年2月19日 東京生まれ。1990年10月ショパンコンクールで第3位(1位なし)及びソナタ賞を受賞。1992年10月から99年の間にショパンの全曲連続演奏会(全15回)を行う。

現在、パリ・日本を拠点とし、ソロリサイタル、室内楽、オーケストラとの共演、放送出演など多岐にわたる演奏活動を展開し、そのレパートリーも数多く完成された音楽性、テクニックは高い評価を得、今後の国内外での活躍に多くの期待を受けている。(HP)

<http://yokoyamayukio.net/>

ヨッフェ Joffie, Dina, 1952–

ソヴィエト(ラトヴィア)のピアノ奏者。1975年にはショパン国際ピアノコンクールでクリスティアン・ジメルマンに続いて第二位となった。以来ソヴィエト国内はもとよりヨーロッパ各地で演奏活動している。1979年初来日。(E)

ラフォレ Laforet, Marc, 1965-

母方のロシアの血を引くフランス人。1985年のショパン国際コンクールで、S. ブーニンに次ぐ第2位を得たことで、世界の注目を集めた。近年は、2003年より毎年7月に、ワインの誉れ高いボルドー地方の複数の城を舞台にした「レ・グラン・クリュ・ミュジニー」という夏季国際音楽祭を創設して、音楽監督を務めている。(P2)

ラフマニノフ Rachmaninoff, Sergei, 1873-1943

ロシアの作曲家、ピアニスト、指揮者。当時の最もすぐれたピアニストの一人であり、ロシアの後期ロマン派を代表する最後の偉大な作曲家である。驚異的なピアノ演奏の技術を持ち、その演奏は指揮と同じように、正確さ、律動的な運び、洗練されたレガート、複雑なテクスチュアを明瞭に弾き分ける力量が特徴的であった。これらの諸特徴はショパンの作品、とりわけソナタ変ロ短調の演奏において、極めて効果的に生かされている。(N)

ラローチャ Larrocha, Alicia de, 1923-

スペインのピアニスト。彼女は幾つかのレコード録音(中でもグラナードスとアルベニスのピアノ作品のレコードは国際的な賞を獲得した)によって高い名声を得ていた。それらのレコードは、彼女のコンサートでの演奏の特色である生氣あふれるアタックと詩的な陰りのバランスをよく伝えており、ロマン派の作品では鍵盤の音色と表現の見事な調和を、モーツアルトやその他の古典派の作品ではより格調高い優美さを、再現して聴かせてくれる。(N)

リ, ユンディ Li, Yundi, 1982-

中国のピアニスト。2000年のショパン国際ピアノ・コンクールにおいて史上最年少優勝、史上初の中国人優勝、15年ぶりの「第1位」を獲得、という快挙を成し遂げて世界中にセンセーションを巻き起こした。現在はドイツと中国を中心に活動しているが、今後はアメリカにも拠点を持つことを考えており、よりグローバルな演奏活動が展開されそうだ。(P2)

http://www.universal-music.co.jp/classics/yundi_li/main.htm (日本語)

<http://www.deutschegrammophon.com/jp/artist/yundi/> (英語、中国語、日本語)

リパッティ Lipatti, Dinu, 1917-1950

ルーマニアのピアニスト、作曲家。リパッティは輝かしい巨匠であつただけでなく、まれに見る鋭敏で繊細な音楽家でもあった。ロマン派のレパートリーにおいては、その音とフレージングは貴族的ともいえる洗練された響きを見せた。対位法を用いた作品では、各声部が、それぞれ完全に独立した指で弾き分けられることによって、まれに見る明快さと生命力が引き出されている。(N)

ルービンシュタイン Rubinstein, Artur, 1887-1982

ポーランドのピアニスト。ルビンシュタインの最も強く最も深い芸術的本能を刺激した作曲家は、初めのうちブルームスであったが、ショパンが徐々にそれに取って代わった。そして、20世紀の偉大なピアニストとしてのルビンシュタインの地位を不動のものにしたのは、何よりも彼のショパン演奏であった。協奏曲から嬰ヘ長調ノクターンop.15 no.2(お気に入りのアンコール曲であった)に至る全ピアノ作品において彼が示して見せた、豊饒で極めて華麗な音色のなかでのフレージングの温かい表現や情感あふれる叙情性は、ショパン解釈の一つの理想的基準となっている。(N)